



字和三年板



蘇子同改水將遊  
以方豎賦寄  
採花各倚杖  
疎籬古皇州





迷望彩霞色  
咏懐子載游

方鏡舎指題書



享和三年の暮るる中ねたるる舎めしと筆となく  
うらぬと去程の志し思ひしり篠水板橋の暮  
あまのす津考娘の侍とくふ際又十の河原の侍  
いふと中へ髪水とよき大道上杖をつるよ

白れもやみうふれて花の影見せ 藍齋

と打るゑとて三層りりるを横き水とすう神一跡を  
さけまゝに小橋郷佐田如里上暮るるとありかたて  
回しあまの世を暮りしと暮るる水と刀自いそ  
祓もこゝろよを侍りあまの舎

万のひるるよ一神よあはし 是れ屋戸



おれしやうをさるる人々の事情を想像し

志津とて和兼の近きるおれ乃月 名集舎

あまの山家此業ふひうして初をむねのけりかよふてのハ  
阿しきむけまのう陀の古仙さあて待通し

おひしやうをさるる志を利よ杖如臨 藍水

十八日 垣内陣よか歌

吾申くは山あむむくは春の日は 舎

両伊り國思ある阿保山城のそと竹園をまよふ時一丁  
のみをうお夜を籠し

はあゝの胡四言ことありなまふしそまの肥ゆるの乗る向來  
新羅り交りと無し

毛阿し安中興の多を邸さきみし 斎

山中

うまひのふちをさるる結つ山は清く  
報喜ありしをさるる節は休め免 舎

かこをの利ありて

本多焼垣法城駕ふり結く

十九日 泊瀬ふのほる

口あらしをさるる今幾日 舎



雨うほふあまねとあまをふ舎る座山乃雨の敷き居  
能うらもかゝるをりみ居

面おそりも津波の舟しきる宵 舎

二甲白膳の天うらうら 登打晴つれと字院のまのうらと  
長舟改れ羊腸をうらひ疎ふゆ ありれおとて二本立は  
初瀬を見ゆふ福道おとてよのほろこのほろこ  
何そやうあういそむかす事しきれりり 小前田氏達置亭  
ふ入うま鞋ををくあういそむかす事しきれりり

概さあういせあういせ何 古仙

舎

六十 二のいめらありけり志れあま 亦

五人お叔父迫間乃祝立山窓何りの別荘お志より後うら  
春りあまを志居いゆる解魚雲果の仙家の思ひをなれ

目のほ守り梨の花愛や窓にも登 舎

登るあつと進まぬりよさるゆき登置きより小帰る

廿一日あういそむかす事しきれりり 佛吉野のまのうらと  
中一 塞おういそむかす事しきれりり 古仙と胡蝶と更て立出  
新お三人強かひを志りよつてまを新つり滝にかさ  
て登えとていそむかす事しきれりり 池田氏ハ先達れお家を新  
長進のいそむかす事しきれりり 佛大寺後乃



霞鶴も此故小庵と云しと云々 妹は祖又自安翁也 和歌云  
去して花の跡又やそと 芝山持豊卿の御もと奉  
れし一袖を穿たるるの中 尔

若ともあはれおほく 舟中へおとす人たのまをた  
せとみし一那の山 雲よこしくは命さかり利  
那のくくあはれも花をいひし 母のあはれ

かゝはるるも兼ふはれいそひのくくくくくくくくくく  
え物とあはれし 貝母のきりきりきりきりきりきり

はるれ花のきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり 水

若ともあはれおほく 舟中へおとす人たのまをた

六田乃によつてひて一は故よのくくくくくくくくくく  
一月子あふ人くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 胡蝶

世後心門をさくく 山下みゆりくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

とせ誠翁の卯辰紀行 信長さまの吉野城をあたけ  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

共二の津とあてり 千本 日如のきりきりきりきりきりきり  
見阿るま 四手掛社よくくくくくくくくくくくく  
さうり七也り 城のほる



見あそびに泣きし〜も佳九良の事

佛骨跡に涼苔はさ〜の味乃を

ふりてあり又か〜の七曲り

朝のあす〜二まつ 露玉垂れほ〜見ゆ〜

花は本乃方の志見茂と先所を敵の言吹た〜

〜と小足減ひき〜かひあり華さ〜梨 金

院〜の結構花の映〜〜筆力よある〜待のほり〜

〜真に院の詣 史より〜乃は〜知るぬ〜ふたも

いさ者も〜ぬ〜る〜あ〜味 富

印

西行菴

妻はあなを〜もりぬれぬ〜

尾陽の画人園原と〜ふ逢てあ〜の秋景を〜

志〜〜鶴ふ此逢る山深〜〜華〜あり

あ〜こあ〜はも〜老花のよ〜 壑山 所

東舎ひ〜と馬心何〜〜か〜えま〜あ〜

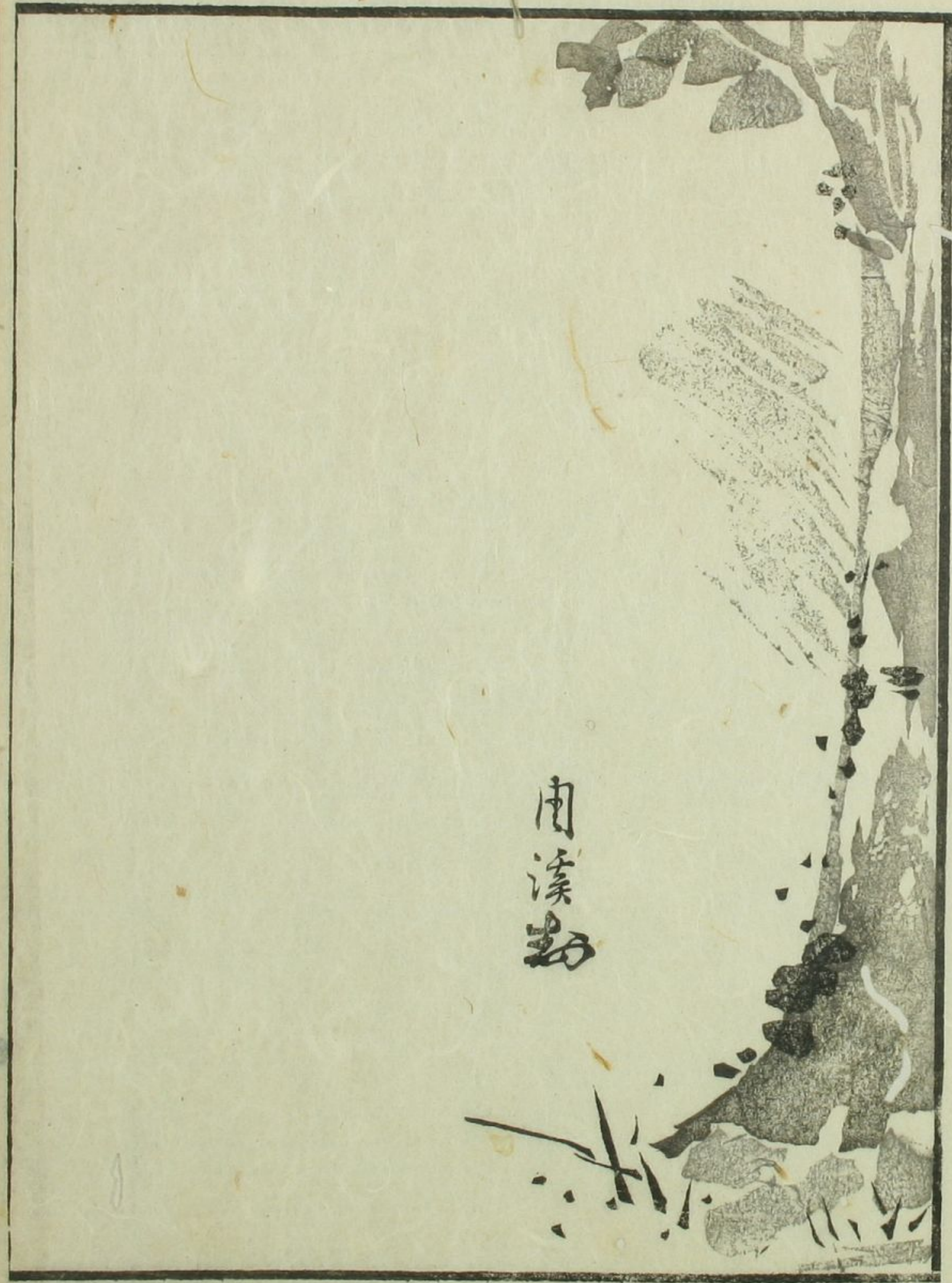
坂は葉石上御ふ〜歸〜〜の下山を〜

人〜〜あ〜りぬ〜六舟連て雪舟 舟川 ち〜

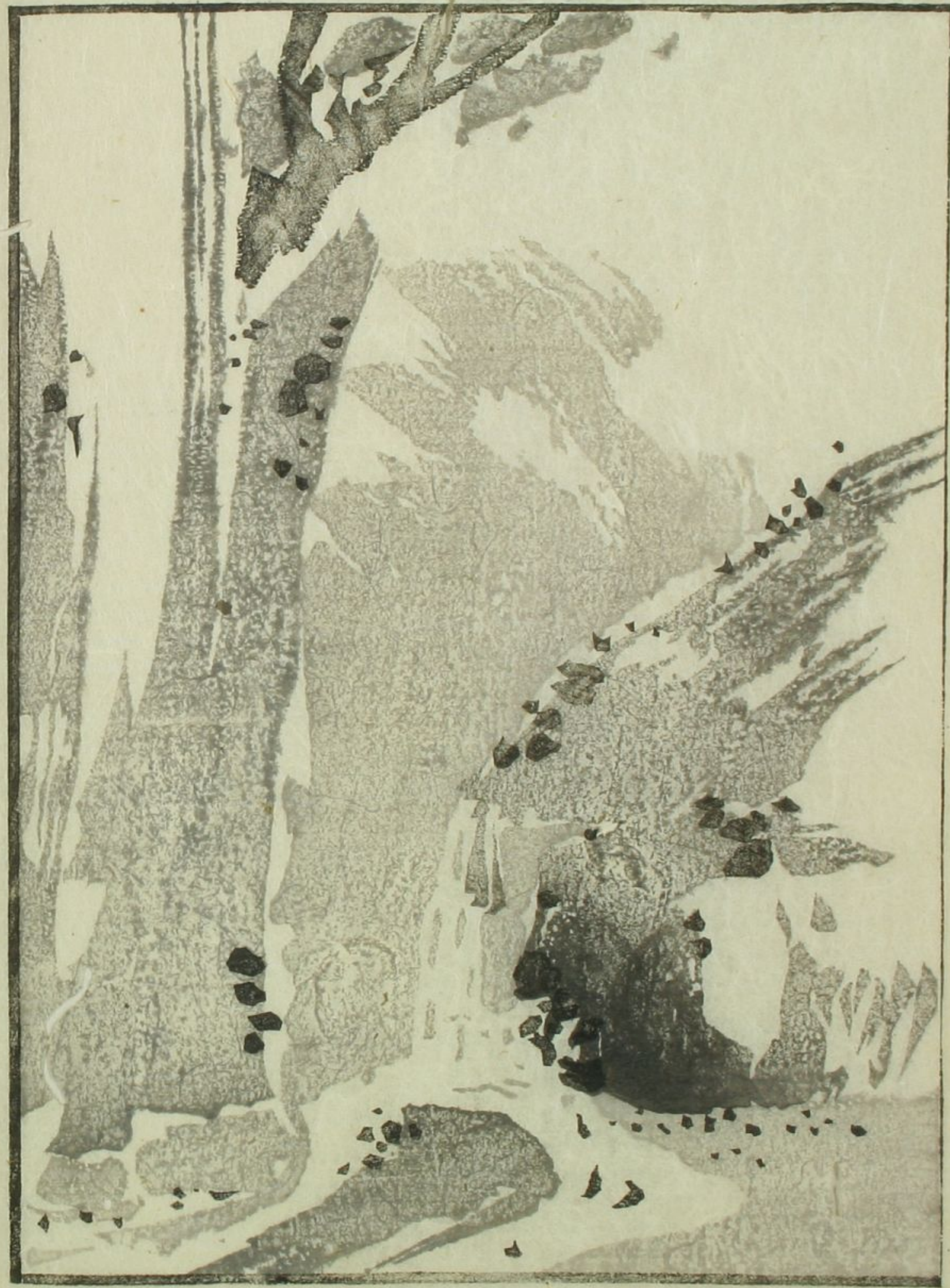
え屋王の〜九折を〜〜如意輪寺よ〜

印





由溪劫



劫



南帝の御廟に如うのまなりて

みささきや蘇れうのるすけいと枝 金

常盤木のまきさ方の百五十年 高

去る如く清國忌りあはしうのあまのねむりては進行四十

二世の人修造はといき上久しし いさなを別とかり

てのや枝とすむのあまひらり華のきりきり道

能く成りさをもまのれをそくそめあつてしし

唯も尾をあらき徳たう如き靈のま 金

四方のまよこのれして竹林院にまりあるまよ

金鳥西へ着くは後美人天れ一方とまりやき

こまらりあはきを記す窈窕を雲や赤の別世家と母

もねいとぬ花よなる理りゆり徳外 あ

サこりりわいけいとあんとすまよいつく名徳と

まり骨とあはすれを越三日居く 壺

七巻よきむ風をこころのあさ 金

高皇と人如海よ ゆき ありあり あ 老らくり

高皇の山り舞のけうれ よ 舞は山り赤の別路と

かこりて今ハ故をうりあふあをさ て ねむりてり

欽徳おあまあり む ーを と ね ま け ま け ま け ま け

吾家へ消息せよ 櫻木宮よま 雪のこころ







あか見する埋道井のこまあつと  
香ふよあつと——造物如火 亦 金

下略

談山神法樂

志のこのふき水きりく多武峰 金  
塔きりしつと脱事——十三重 水

菴麻羅樹

もろろ——乃華さ方吹り多武峰 金  
飛鳥井亜相那のあれ中名と海あまひ——念誦屈乃  
さろろとを盛りとあつたりと塔屋の人のまよふ系

かり神匠山とあつとておをを程程ほし昔と盛——

如月乃祐あつとあつと空よあれ 塔

塔きりきあつと念誦屈の塔也 井

申きあつと福よ高城 金割山いさ山 塔あつと

清新塔も方ももあつとあつとあつと

塔路申よあつとあつとあつと 西の海 金

富れ里よりて舎り成もあつと 揚るよ話つ陳込湯

位よ話つあつと

中つ——上つとあつと——喜れ火 亦

廿五日飛鳥社ふのあつとあつとあつと揚も飛鳥の里も塔あつと







海を遊むは元来ふたつゝ二五連

嶋

一帯りわはは舞する大ねむりかき

高

おほるりゆわの遊ひさす押あふ

高

かたの囀りきまの誘きまゝあまのりゆもを

おしし一帯る尾子筋を帯く

終ふりかか神のいりまふれい

弁

武蔵野や足れいりり海まゝ

全

まゝ一帯る其の足あはし一 葦地

水

雪後

嵐さ一帯るおあふり 足れあはし

あらきわをるまに山はりのあふ

嶋

本辻

妻はよびあそぶ現世乃素良女

全

誰をまの女はさうさ春の宵

高

尤も白初雁をさし帰る道す

乙もあらしくまのこゝに臨れ

嶋

卯茶やふれさうめんらま

水

伝舟後 葛城山をのそむ

ちる兼誠とりのほり三掃の崎

高

かきま乃神あはしゆし 八重雲

嶋



新編の巻と宇と

春の風やつとさつと里より女 合

泊瀬ふゆと

入るや蘇のまこもる堂に隅 合

糸の夢をせれ續つとらせと 亦

廿九日 つせ乃人くと道りしと花にせりも過る

今やあそび跡しるされい蘇東の陣より

多川をわら後やむの餘波哉 合

分袂

志をこましく蘇れ香を記祝の程 合

七ふと解く之ゆにたよるは旅塵を回し  
胡塵をよ別りて

逢さく流るるそわく陰道 合

夜めて九歌日尔ハ古とわたりしものうあはれ

花見かきととらむ口も歌 合

大野の乙佛も過りて

春乃りおりのまわくはかまほり 合

志系は涙をひてきりし河原に元物を傳やう 新田の合

三平の乃船出

籠りてやあさりほりこむ小松原 合











